会　告

平成元年度史学研究会大会および総会は、予定通り、十一月二日（木）午後一時より楽友会館において開催されました。

公開講演は前川和也、谷川道雄の両氏により左記の演題で行なわれ、盛会裡に終りました。

古代シュメールの社会経済史
——モデルと計量——　前川和也氏

六朝時代の名望家支配について　谷川道雄氏

なお、大会と総会に先立って開催された秋期定例の理事評議員会において、平成元年度前期会務報告がなされました。

平成元年度 史学研究会大会講演要旨

古代シュメールの社会経済史
——モデルと計量——

前川和也

この報告では、まず、シュメール都市国家時代末期（前二四世紀なかごろ）のラガシュから出土した楔形粘土板文書を主材料として、シュメール都市を構成する諸社会グループについて、ひとつのモデルを呈示してみた。そしてつぎに、統一王朝時代（ウル第三王朝時代〔前二一〇〇—二〇〇〇年ごろ〕）のギルス（＝ラガシュ）やウンマなどのテキストをもとにして、当時の農業トレンドを計量的にとりあつかってみた。

都市国家時代の最末期、わずか二〇年たらずの期間のラガシュから出土した約一八〇〇枚の行政・経済文書には、王妃の所領で働らく人々への定期的な穀物支給を記した書板、かれらへ割当地を賦与した記録、またかれらの集団労働（賦役）にかんする記録などが含まれている。これらの記録にもとづいて、わたくしは、シュメール都市国家の成員は、割当地保有者層と非保有者層の二社会グループに分かれていること、また、専門的職能にもとづいた国家奉仕を行なっているかどうかによって、割当地保有者層はさらに二グループに分類できること、などを論じた。

いっぽうディアコノフは、古代シュメールにとって本質的な社会組織は、「都市」ないし「神殿」なのではなく、むしろ「私的な」、「共同体」組織であると考えている。すなわち、「村落共同体」の「自由な」成員こそがシュメール社会の核であるとみなしている。つまりディアコノフ・モデルによれば、現存のラガシュ文書は、シュメール社会諸グループの全体的復元には、あまり役立たないことになる。これらの史料では、「都市国家」の公的活動のみが語られているからである。けれどもここで詳述はさけるが、やはりディアコノフのモデルは、シュメール都市社会を把らえるには不適切であった。

さて、シュメール統一王朝時代（ウル第三王朝時代）の無数の行政・経済文書にか

んしては、統計的な研究が、実りおおい成果をもたらしてくれる。われわれは、同一ジャンルの多くのウル第三王朝時代テキストを集めることによって、計量作業を行なうことができる。またときには、単一テキストについてさえも、統計的な方法を用いることができる。一枚の長大な行政・経済記録に、膨大な情報量が含まれていることがあるからである。

ウル第三王朝時代のギルス（＝ラガシュ）、ウンマなどから、「国家」あるいは「神殿」直営耕地にかんする経営記録がおおく出土している。これらのテキストには、耕地面積、耕作に必要な穀物量、あるいは収量などにかんする数字が羅列されているのである。この報告ではまず、これらのテキスト内の数字をどのように処理すれば農業生産力が計量できるのかを示した。また、このようにして得られる数字が、当時考えられていた標準期待収量の値（一ヘクタールあたり一三八九リットル、播種量の三〇倍）からどの程度まで離れているのかを考えてみた。そしてまた、当時用いられていた基準にしたがって直営耕地を分類し、諸耕地片の面積などをあらためて計量的に処理することの意味を論じた。たとえばこのような作業によって、エコロジカルな土地条件のちがいをも、詳しくあきらかにできるのである。

前三千年期のシュメールは、史料すなわち粘土板文書の多さ、そしてとりわけ行政・経済文書の内容の精密さという点で、古代世界のなかできわだっている。けれども同時に、シュメール行政・経済文書が、限定された世界をあつかっていることにも、注意しておかなければならない。たとえばテキストは、私的経済については、ほとんどなにも教えてくれない。だからこそ研究者は、手にしうる粘土板史料にもっともふさわしい研究アプローチとはなにか、そのアプローチを採ったばあい、どのような結論が、どの程度の正確さでもたらされるのか、そしてそのアプローチによってはなにを解答することができないのか、といったことをたえず自問しておかなければならない。そしてこの報告では、シュメール行政・経済文書の研究にあたって、社会「モデル」を構成し、そして「計量」的アプローチを採ることの効用と限界について、詳しくふれてみた。

六朝時代の名望家支配について

谷川道雄

六朝時代がこれに続く隋唐時代前半期と共に貴族制の時代であったことは、今日、学界の定説となっている。このような時代規定を明確に打ち出したのは、いうまでもなく内藤湖南であるが、湖南の見解はまた、清朝考証学の成果、さらに遡っては明末清初の経世家たちの史論をふまえたものであった。湖南以後、六朝貴族制の説は、とくにその学統を継ぐ人びとによって深化発展させられて、今日に至っている。しかし、この数世紀に及ぶ六朝貴族制研究も、貴族階級の社会的基礎をどこに置くかという点になると、定論というべきものがない。それば かりでなく、戦後においては、中国史の時代区分問題ともからみ合って、諸説紛々たる状況を呈し、私の提起した所謂「豪族共同体」説に対しても、多くの批判が寄せられた。それらに共通する批判点の一つは、拙論が、豪族と宗族・郷党との連帯関係を見るに当って、倫理的な契機を強調し

すぎているということにある。そこで、この〝倫理的関係〟を最もよく表わす豪族の賑恤行為の意味を考え、これまでの批判に答えたい。

六朝の史書に散見する名望家層（豪族、貴族）の賑恤行為は、単なる個人の慈善心に発するものではない。後漢の崔寔の『四民月令』では、賑恤事業が、季節の循環に応じた家政の年間計画の中にはめこまれている。このことは、南朝宋の顔延之の著わした家訓『庭誥』やその他の史料からもうかがわれる。つまり賑恤行為は、名望家が自然と社会の調和を図る立場から、家政の一環として実行されたものと推定できる。

このように、自然の摂理にしたがい、民生の維持に努めることを自らに義務づけた名望家とは、歴史的に見ていかなる存在であったのであろうか。内藤湖南によれば、六朝の貴族階級は、代々官僚を出した家柄が自然に地方の名望家として定着したところに形成されたという。この見解に従えば、名望家とは、個人の能力・功業の累積したものであり、そのようにして一旦形成された家門は、その子孫の各自を規定する。こうした家と人との相互関係が、資産のみならず、学問・教養、政治的地位等々において、社会一般から卓越した家族を成立させる。そして漢帝国の動揺・瓦解の過程で、上家＝下戸というように、家と家との間が上下関係で結ばれ、この結合関係が新しい社会体制を形成してゆくのである。

この上下の区別は、それぞれの家に属する個人の人格的区別でもある。六朝貴族が修得した玄・儒・文・史の四学、道仁二教、あるいは秘学と総称された神秘的色彩の濃い科学知識等々は、宇宙の摂理を体得し、よってもって民衆の生を保証しようとするかれらの道徳意識につながる知識体系である。かれらの人格の卓越性はその容姿にも表現されていて、『世説新語』などに往々玉人と形容されている。つねに破産や流亡の危機にさらされている民衆は、このような特別の人格に依存して生きる他にすべがなかった。名望家の家族生活には公私二面があったことが知られるが、このことからも、名望家の家が社会の指導を責務とする一種の公的機関の役割を果していたことが推測される。

名望家の社会的行為は、賑恤のほか、農事指導、紛争調停、地方教化などが数えられるが、外敵に対する地域防衛も、重要な一つであった。名望家に統率された地域の軍団は、時に現王朝を支える軍事力となった。東晋政権の国軍であった北府軍団は、華北の名望家に率いられて南下した難民集団に由来する。南朝易姓革命もまた、同じ性格の軍団が参加することによって達成されている。北朝では、北魏の部族軍の流れを汲む胡族中心の軍隊が崩壊したのち、各地に郷兵集団が発生した。これを整備発展させたのが西魏・北周・隋・唐の府兵制である。このように、名望家支配が六朝諸王朝の軍事的根幹をなしたことから見ても、それが六朝社会の基層構造であったことは、ほぼ疑いがない。名望家の賑恤行為は、したがって、この時代の本質に深くかかわる行為であった。

一般化して言えば、当時の賑恤行為は、自然と人間の関係を基底とする人間と人間の関係を表出するものであり、人間存在に深く根ざす社会的行為であった。